古事記「佐斯夫」考

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 1983-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 服部, 旦 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/1611

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

古事記「佐斯夫」考

服部　旦

はじめに

『古事記』石之比売皇后歌の「佐斯夫」については、永らく未解決の問題がある。本学学生の川越いち子さんは卒業論文にこの植物をとり上げ、文献と実地調査の面から検討した結果、歌謡作者はサカキをシャシャンボ（佐斯夫）と誤認したのではないか、という興味深い推論に到達した。

時間的に制約を受けた最終学年における研究としては労作に属するものと思われるが、本人が自覚して記しているような研究不足の諸点やいささか論を急ぐ面が伺われ一層の充実が望まれる。しかし、就職も真近かに迫っており研究再開の目処が立たないので、とりあえず本誌で発表して頂き、不十分な点については後日に期待したいと思う。以下は川越さんによる卒業論文の要約である。

一

「仁徳記」石之比売皇后歌によまれている樹木「佐斯夫」は、現在広くシャシャンボという植物に当たるものとされている。しかし、これに比定した場合、同歌謡中によまれている「葉広ゆつ真椿」と樹木の高さにおいて矛盾が生ずるために、この問題は今に至るまで長く未解決のまま残されている。

同歌謡を最初に掲げると、岩波日本古典文学大系本は、[注(1)]

つぎねふや　山代河を　河上り　我が上れば　河の邊に　生ひ立てる　烏草樹を　烏草樹の木　其が下に　生ひ立てる　葉廣五百箇真椿　其が花の　照り坐し　其が葉の　廣り坐すは　大君ろかも

と訓み下しており、「烏草樹」を校注者の倉野憲司氏は、

和名抄にも新撰字鏡にも烏草樹にサシブ（サシブノキ）の訓がある。サシブはシャクナゲ科の常緑灌木シャシャンボのことであるが、その下に椿が生えていたとすると、木が小さ過ぎるようである。或いは別の樹か。

と注しておられる（最近の『古事記全註釈』もほぼ同様である）。樹高に関する不審は小学館日本古典文学全集の注も同様である。

サシブの部分に関する原文は、真福寺本では「佐期夫袁佐斯夫能紀」、兼永筆本では「佐斯夫袁佐斯天能紀」と表され、各々傍点の部分において一致を見ない。これについて『記伝』は、「記中に、天を假字に用ひたる例なし、」・「契沖も師も、上なる句の終の袁を此ノ句の首に屬て、小の義とせられたれど、然ては二句の連きの調わろし、」[注(2)]と仮名表記と歌謡の調べ面から「夫」を採用している。「期」について宣長は触れていないが、兼永筆本は二ヵ所共「斯」を用いている。今は朝日古典全書本、岩波古典文学大系本、小学館日本古典全集本、神道大系本などの代表的校訂本が「佐斯夫袁　佐斯夫能紀」としているのに従い論を進めたい。

注

(1) 倉野憲司・武田祐吉『古事記・祝詞』（日本古典文学大系）二七一ページ、岩波書店、昭和三十三年。

(2) 『本居宣長全集』第十二巻八七ページ、筑摩書房、昭和五十一年。

二

この歌の前半部の民俗的性格と後半部の宮廷寿歌の性格との間に内容的に断層が感じられるところから、山路平四郎氏は、

その前半の「サシブヲ」までは、あるいは、川辺にサシブの木が生い茂って曳船の難渋をいう山城地方の舟曳き歌（中略、川越）の断章が、天皇讃歌に結びついたものか

と想像する一方、引き続いて、

あるいはサシブを呪力を持つ樹木とし、その呪力の下に生い立つ椿を（中略、川越）更に一層呪力に富むものとして、「照り坐し、広り坐す」の比喩に生命を吹き込むための机上作品であったのか（後略、川越）[注(1)]

とも疑っておられる。この歌が実景を詠んだのか、或いは単なる机上の作品だったのか、もし机上の作品であったのならばサシブと椿の高低の矛盾は実景を見ずに作歌したことにより生起したものということになり、さしたる問題ではないことになる。守屋俊彦氏は右の山路氏の二案のうちの前者を支持し、

イメージの合わない前半と後半とを、一つの歌として結びつける鎹が、前半では烏草樹、後半では椿になっているのだが、その前半の舟曳き歌そのものの中にも、もともとは椿があったのではないだろうか。

と想像し、前半部にかつてあった椿は舟曳きの苦しい労働中に目に触れ、愛する妻や恋人を連想して「労働の苦しさを癒そうとし」たものであり、後半の椿は天皇を讃める比喩として使われたものとせられ、[注(2)]さらに、

前半の歌と後半の歌とでは、椿の性格が異なってはいるのだが、同じ椿であるところから、それを鎹にして、イメージの異なる前半と後半とを結びつけたのではないだろうか。そして、その際前半の歌の椿を烏草樹に替え、その烏草樹の下に椿があることにし、ともかく二つの歌を結び付けたのである。そこから、結びつきがややぎこちないことになったのだけれど、古代

人にとっては、それ程のぎこちなさは感じられなかったのであろう。[注(2)]（傍点、川越）

と解しておられる。これによれば異質な歌を結びつけたことによりサシブと椿との間に高低の矛盾が生じたことになる。これとは別に守屋氏よりも早く二つの歌謡の接合（？）により起った矛盾としたのは土橋寛氏である。即ち、

（前略）思うにこれは天語歌の歌詞の前に、所伝に基づいて四句を作り加えたものであろう。それならば「川の辺に生ひ立てる　葉広斎つ真椿」とすれば済むものを、どうしてその間にもう一つ「烏草樹の木」を入れたのかというと、「川の辺」と「葉広斎つ真椿」との取り合わせが不似合いと考えたからであって、そのために川べに多く見られ、かつ呪的な花をつける烏草樹を、クッションとして置いたのであろう。（中略、川越）寿歌的パターンが守られさえすれば、烏草樹の「下」に椿が生えているという現実的な不自然さなどは、さして問題ではなかったのである。[注(3)]（傍点、川越）

これは意味合いは違うが性格の異なる歌を結合した（机上で？）ことによりサシブが歌の中に加入したものと見なすものだが、守屋氏の説は「前半の歌の椿を烏草樹に替え」たとする理由は何ら記されていないので説得力に乏しい。「川の辺に　生ひ立てる葉広斎つ真椿」とそのまま歌えた筈である。また土橋氏の、川の辺と椿との「取り合わせが不似合い」という理由も説明がなされていない。椿は川の辺に生えないことはない。また、この場合の椿は仁徳天皇の比喩だが、同天皇は難波堀江・茨田堤・山背栗隈県の大溝・河内国感玖の大溝その他の水利工事で有名だから、「川の辺」と椿（仁徳）とは不似合いと断定することもできない。やはり、「其が下に」と位置関係まではっきりと示していることからして、実景を歌ったものと見るべきではないか。

この歌の前半と後半との間に性格の違いがあるとは言え、果してもともと一方が純然たる民間庶民の間で発生し、一方がこれとは無関係に宮廷内で発生したもので、その出自の異なる二歌を接合改作したとまで推し量りうるものか疑問に思う。宮廷の天語歌の「葉広ゆつ真椿云々」の有名句を知っており、かつ民間の事情にも通じている同一作者が川の辺で実景に触発されればこのような歌は自然に生まれ得る筈である。実際、歌の声調は自然であって、別箇の歌を接合したと思われる不自然な箇所は感じられない。（二歌を接合して）音調を整えるためならば、樹高に関して椿との間に矛盾を生ずるような佐斯夫をわざわざとり上げなくても良いだろうし、またことさら「其が下に」と詠む必要もなく、「其が上に」でも「其が辺に」でもよかった筈である。守屋氏の「古代人にとっては、それ程のぎこちなさは感じられなかったのであろう。」や土橋氏の「現実的な不自然さなどは、さして問題ではなかったのである。」のような解釈では、問題の解決の道は開けてこないのではなかろうか。

注

(1) 山路平四郎『記紀歌謡評釈』一四〇ページ、東京堂出版、昭和四十八年。

(2) 守屋俊彦『古事記研究―古代伝承と歌謡―』一六八ページ、

味が広く、万葉などではモトは「本」、シタは「下」と文字を使い分けているようである。（後略、傍点は川越）

とあり、シタが根元を表わすものではないことを示している。

私は深津氏にお目にかゝる前、佐斯夫は椿の背後の上方から覆い被さるように生えているものと想像していた。『記伝』の解釈もほぼ同じで、

烏草樹（サシブ）は、さしも高く大なる樹に非るに椿の其ノ下に生立（オヒタチ）るとは、〔下蔭（シタカ）の由には非じ、〕烏草樹は、川岸のやゝ高き處にありて、其ノ下ノ方低き處にある、椿なるべし。[注(3)]

とあった。『記伝』の説を山路平四郎氏は「これは、迎えた解というべきであろう。[注(4)]」と批判しておられる。高低の矛盾を解消しようと無理に解釈したものの意と思われる。

再び『時代別国語大辞典』に戻ると、この「下に」は、①②③項において「隠れている」という意味が根底で共通しているように思われる。従って、やはり高い木（佐斯夫）の下部に、低い木（椿）が生えている、と解すべきであろう。

以上から、佐斯夫を今のシャシャンボに比定する限り椿との間の矛盾は解消しないことになる。そこで最近注目すべき説を西宮一民氏が提起しておられる。即ち、

この歌で、烏草樹（さしぶ）の下に椿が生えているとあるが椿のほうが高木である点が疑問視されてきた。しかし、この歌を、あえて事実を倒置して表現した虚構とみる。つまり、神聖な椿―天皇を卑小化（ひしょう）してみせたのである。その理解に立つと「照りいまし」も「広りいます」も、嫉妬心の言わせた強烈な皮肉となろう。

三弥井書店、昭和五十五年。

(3) 土橋寛『古代歌謡全注釈　古事記編』二四一～二四二ページ、角川書店、昭和四十七年。

三

次に、実際の佐斯夫と椿との位置関係はどのようなものであったのだろうか。両者の位置関係は「其が下に」という語で示されているが、植物民俗研究家の深津正氏に示教を仰いだ際、氏はこの「其が下に」を「樹の根元に」と解して、「低いサシブの樹の根元から高い椿が生えていて」と解された。この解釈であれば高低の矛盾は生じないことになる。しかし、サシブが今のシャシャンボに当たるという通常の説をとれば、シャシャンボは暖地に生え日当たりの良い所を好む植物なので、木陰に生えるのは納得し難いように思う。深津氏は、あり得ることだ、と仰しゃられたが、後述（第四章）の私が実際に見た七本のシャシャンボの植生状態からは、納得できない。

これについては「下に」（斯多邇）の語が鍵になっているものと思われる。『時代別国語大辞典　上代編』によれば、

した〔下〕（名）ウへの対。①表（えう）に対する裏。表面から見えない場所。（中略）②下方。（中略）③心の奥。心情を表わす形容詞・動詞に接頭的に用いられることが多い。（中略）モトとシタも樹木などに関して用いられるときには意味が近いが、モトが根元に限られるのに対し、シタは木蔭全体を表わす点、意

自分以外の女性に対してだけは「堂々として寛容な」天皇への「讃歌」である。型どおりの天皇讃歌の、パロディー。[注(5)]

である。新鮮な解釈であるが、たとえ物語歌にせよ大后の作とするには歌の内容(前半)が民俗的(「山代女の　木鍬持ち　打ちし大根」など、この一連の歌にも伺える)であると思われ、天皇を「現つ神」と仰ぐ信仰的情熱の時代に天皇を卑小化する皮肉な歌として『記』が採録しているとも思われないし、仁徳天皇という強大な権力者の時代にも生れ得るとは考えにくい。「事実を倒置して表現した虚構」とするのは、この条の一連の六歌の素朴な印象からして、余りに知的でわざとらしい不自然さを感ずる。西宮氏の説も、高低の矛盾をあえて解消しようとした所から生まれたもののように感じられる。

注

(1) 深津氏のご論文には、「植物和名の語源」(『言語』七巻一号、昭和五十三年)などがある。

(2) 『時代別国語大辞典　上代編』三五三ページ、三省堂、昭和四十二年。

(3) 第一章注(2)書八八ページ。

(4) 第二章注(1)書一四〇ページ。

(5) 西宮一民校注『古事記』(新潮日本古典集成)二一〇ページ、新潮社、昭和五十四年。

四

私はこの問題に関して、国文学と植物学の分野で各種文献目録を探索したが、以上の高低の矛盾の問題は一向に解決されていないように思われる。そして感ずるのは、研究者が過去の注釈書類や植物図鑑を参照する程度でこの問題を検討しているのではないか、ということである。そこで、私は佐斯夫が比定されている現在のシャシャンボは具体的にどのような樹木なのかを実地に調査した。そして、文献的な研究とも合わせて、佐斯夫がシャシャンボに比定しうるかを考察(次章)したい。

サシブという植物名を上代の諸文献を探索した結果では、『記』に一例(『出雲国風土記』の「佐世」は問題がある)見るのみであった。古辞書類では、管見に入った所では『和名抄』・『新撰字鏡』・『伊呂波字類抄』・『合類節用集』・『類聚名義抄』・『動植物名彙』(伴信友)・『倭訓栞』・『俚言集覧』(但し「しゃしゃぶのき」)にサシブが見えるが、シャシャンボは載せない。そして、近代の辞書・百科事典・植物図鑑を見ると、サシブをシャシャンボの古名として載せるのが、『広辞苑』(A)・小学館『日本国語大辞典』(B)・『樹木大図説』[注(1)](C)・『牧野新日本植物図鑑』[注(2)](D)・『朝日百科世界の植物』[注(3)](E)で、さらに、この中(A)・(B)・(C)はシャシャンボの漢名を「南燭」としている。『新註校定本草綱目』[注(4)]は南燭の和名をシャシャンボに当てている。『古典植物辞典』[注(5)]もサシブの漢名を南燭としている。その他、『草木図説』がシャシャンボの一名を「ワクラ(ママ)」とするのが目についた。[注(6)]

ここで了解することは、かつてはサシブといわれた植物が、近代に至ってシャシャンボと認識され、辞書に記載されたということで

ある。『出雲国風土記』大原郡の「佐世乃木」[注7]も加藤義成氏はシャシャンボとされるが、これには問題が残る。[注8]

さて、シャシャンボの実物を観察すべく諸所の植物園に問い合わせたり、諸文献を探索しているうち、次の論文を見つけた。即ち、池田寅雄氏の「佐世保考」[注9]である。氏は、佐世保の地名起源は『記』の佐斯夫と関係あるのではないかと推測し、この佐斯夫の比定を小清水卓二氏に求められた。そして、小清水氏より、

シャシャンボ（南燭）一名ワクラバ
古名サシブノキ
学名　Vaccinium bracteatum Thunb.　ツツジ科
分布　本州中南部—四国—九州方面の浅山に自生する常緑灌木、或は小喬木、琉球、台湾にもあり奈良県では玉置山神社の境内に目通り一米の見事なものがあり、アゴ湾の賢島ホテルに群生したものがある。（後略、川越）

との回答を得られた。そこで、昭和五十七年十一月二十日、三重県志摩郡賢島の賢島グランドホテルに赴き（巻末地図A地点）、現地で「ササブ」・「ササブク」と呼んでいるシャシャンボの木を見せて頂いた。この木の高さは約二メートル五十センチである（巻末写真㈠）。葉形はネズミモチのそれによく似ているがシャシャンボの方がより堅い革質で鋸歯状である点が異なる。そして、緑色の葉の他に、黄ばんで赤や黒の斑点のある葉が多くあり、この木をワクラバ（病葉）とも称した理由が初めて了解できた。

この木には直径五ミリほどの小さな黒い実（写真㈡）が沢山付いており（写真㈢）、口に含むと甘酸っぱい味がした。味はザクロよりも甘くスグリに近い。松阪の宣長は佐斯夫を『記伝』において、「今俗にさゝぶ（賢島方言と同じである。…川越）の木とも、しゃくぶの木とも云り」としつつ、「此ノ樹契沖云ク、今山里人はさせぼの木と云、柃（ヒサカキ）に似て小き実あり、熟すれば紫の黒みたるやうにて童などは、取て食ふとぞ承る（ウケタマハル）[注10]」と記し、江戸時代食用になったことが判る。

賢島グランドホテルの谷口ふみ子さん（昭和五年生まれ）も「モモがなっている。[注11]」と言って馴れた手つきで食べられた。戦争中にはこの実をよく食べたとのことである。また、谷口そのさん（明治四十年生まれ）、賢島ロッヂの栃原（とち）えつさん（昭和二年生まれ）も、子供の頃山に行った時には必ず食べたそうで、「フサフサと実がなっていたので枝から実をさしとるようにして食べた。[注12]」と言われる。

いかなる理由で食べたのかを尋ねると、「甘酸っぱくておいしいから食べた。山へ行った時見つけると、決まっておやつ代わりに口を黒く染めるようにして食べた。」と異口同音に答えた。これにより、江戸時代も現代もササブ即ちシャシャンボの実を人々が食用としたということが判明した。

ササブは、海岸近くの山にあると聞いたので附近を歩いてみると、潮風の吹き抜けていきそうな小高いところ（巻末地図B地点）に見つけることができた。賢島グランドホテルのササブも海から三メートル程の所に植えられており、日光と適度な風を好む植物であることが判った。賢島でシャシャンボを見る一ヵ月前の十月に高尾山の東京都立浅川実験林でシャシャンボを見ることはできたが、これは花の咲かない、従って実も付かないものだった。樹木研究室長の

小林義雄氏のお話では、三十年前に愛知県より移植したものであるとのことで、賢島を訪れて改めてシャシャンボの好む環境を認識した。

以上、賢島での実地調査と『記伝』に引く契沖の説によるところからみて、佐斯夫が今のシャシャンボならば、堅果・果実類が重宝されていた古代においてもこの実を食用とした可能性があるのではないかと思われる。[注(13)]

注

(1) 上原敬二『樹木大図説』、有明書房、昭和三十四年。
(2) 牧野富太郎『牧野新日本植物図鑑』、北隆館、昭和五十四年。
(3) 『朝日百科　世界の植物』七巻、朝日新聞社、昭和五十三年。
(4) 鈴木真海、木村康一他『新註校定国訳本草綱目』第九冊五六八ページ、春陽堂書店、昭和四十九年。
(5) 松田修『古典植物辞典』、講談社、昭和五十五年。
(6) 飯沼慾斎・北川四郎『草木図説』木部（上）、保育社、昭和五十二年。
(7) 加藤義成『出雲国風土記参究』（改訂増補版）四三三ページ、原書房、昭和三十七年。
(8) 『記伝』で佐世は「烏草樹（サシブ）にやと云り」と契沖の説を紹介している（第一章(2)に同じ）が、加藤氏も注(7)書同ページで、佐世乃木を、

ツツジ科のシャシャンボ（南燭）で、一名ワクラハ。中部以西の浅山に多い常緑の灌木、或は小灌木で、高さ二・三米、枝多く葉が繁く、花は白色壺形で房状花序をなし、紫黒色の小球果を結ぶ。若葉は紅色を帯びて美しい。この葉を搗いて赤色の染色にも用いた。古代にはこれを頭に刺したものであろう。（傍点、川越）

となされる。

ただ、植物名はその地方の方言の面からも考察する必要があり、例えば武田久吉氏によれば、尾瀬沼の東の「檜の高山」の檜が実はネズコを指しており、南部地方の「檜山」の檜はヒバ（ヒノキアスナロ）を指し、いわゆるヒノキとは樹種が違うとのことである（武田久吉「地名と植物」『ドルメン』五巻四号、岡書院、昭和十四年）から、植物とその地方の名称との関係は見落してはならないと思われる。『出雲国風土記』の佐世についても、これが方言であり大和地方のサシブとは別の植物だった可能性もありうる。また、倉田悟氏の『日本主要樹木名方言集』によれば、シャシャンボの方言は百種にのぼり、その中でただ一例「サセッ」（鹿児島）が見られるのが大変注目される。『出雲国風土記』の例が辺地に残存した例であろうか。その地方独特の言いまわしによりビ・ブなどが脱落した可能性もあり、現地の発音を詳細に調査する必要があるので今後の課題にしたい。

(9) 池田寅雄「佐世保考」（佐世保史談会『談林』三号、昭和三十六年）。
(10) 第一章注(2)に同じ。

(11) 谷口ふみ子さんによれば、木の実　果実一般のことをモモと いうとのことである。小学館『日本国語大辞典』の「モモ」の項に、神奈川、岐阜、愛知、滋賀、大阪、和歌山、山口、高知の方言で「木や草の実」を指すとある。

(12) 実（複数）を口に含み、枝を右（または左）に引き、頭を左（または右）に動かして、口の中で実をしごき落とすようにする意。

(13) ご自宅で古典に登場する植物をはじめとして様々な草木を栽培し、シャシャンボも数本栽培された経験がある小野田光雄氏は、この木には白い壺状の美しい花が咲き、非常に清潔な印象を受けるので、古代にはこれを神に供えたこともあったのではないか、と語られた（昭和五十八年一月二十二日ご教示）。この観点からも今後さらに検討したい。

五

次に、本章では佐斯夫が現在のシャシャンボに比定する説が妥当かどうか検討する。『記』の佐斯夫は、やがて「烏草樹」と表記されるようになっていった。即ち、『倭名抄』（二十巻本。那波道円校訂活字本）には「烏草樹　楊氏漢語抄云烏草樹佐之天乃紀辨色立成説同」[注(1)]（傍点、川越）とあるが、『箋注倭名類聚抄』は「広本夫誤天」[注(2)]（傍点、川越）と正している。『新撰字鏡』は天治本・享和本共に「烏草樹左之夫」[注(3)]、『伊呂波字類抄』は「烏草樹サシフノキ」[注(4)]、『類聚名義抄』は「烏草木サシフノキ」[注(5)]と声点を附し、『合類節用集』は「烏草樹サシフノキ」[注(6)]とある。

本草関係の書を調べると「烏」のつく植物名が非常に多い。例を挙げると、烏文木、烏木、烏草、烏飯草、烏蔵苺味、烏臼木など多数である。『諸橋大漢和辞典』の「烏」の項には「②くろい。黒色。」とある。写真(一)に示したようにシャシャンボの実は黒い。『重輯新修本草』の烏臼木の項には「子黒色」とあるので[注(7)]、「烏草樹」も黒い実の成る樹木であることを示しているものと思われる。

しかし、やがて佐斯夫の漢名を「南燭」とされ出すのは不審である。『倭訓栞』[注(8)]がそれである。『新註校定国訳本草綱目』の南燭の項には、

株は高さ三五尺、葉は苦楝に類して小さく、冬を凌いで凋まぬ。冬に紅子を生じて穂になる。人家で多く庭除の間に植ゑ、俗に南天燭といふ。[注(9)]（傍点、川越）

とあり、その和名にシャシャンボを当てている。[注(10)] シャシャンボの漢名を南燭とするのは『広辞苑』、小学館『日本国語大辞典』、『樹木大図説』、『牧野新日本植物図鑑』、『古典植物辞典』の辞典・植物図鑑、その他『記』・『出雲風土記』の注釈書類にまで及んでいる。

けれども、右の「南燭」に引いた形態はシャシャンボのそれとは全く異なる。南燭では実が「紅子」となるのに対し、シャシャンボは述べた通り黒い実である。明の『本草綱目』は江戸時代『多識編』、『大和本草』などに伝えられていったが、その時和名に置き替える際に本草学者が屢々誤りを犯したという。『倭訓栞』の、

さしぶのき　和名抄、本草南燭、今なんてんと云、（中略）佐之夫ハ南燭たること明かなり、

とする、サシブ→南燭→ナンテンという説もこの誤ちを踏んだもの[注(11)]

らしい。

ここでシャシャンボの方言名を倉田悟氏の『日本主要樹木名方言集』[注12]により調べると、ちょうど百種の呼び名が挙げられている。初音だけでも、ア、ウ、エ、オ、カ、ク、コ、サ、シ、ス、チ、ト、ナ、ハ、ヒ、フ、ホ、ミ、ヤ、ヨ、ワがある。ここには、サシブ、サシブノキと全く同じ例は見られなかったが、微妙な発音の違いで全く同じになってしまうもの、かなり似ているものは沢山ある。主なものを挙げてみると、

ササブ　三重（志摩）
ササボ　三重（志摩）
サシボノキ　伊豆新島
サスボ　伊豆新島
サセッ　鹿児島（薩摩半島）
サセビ　鹿児島、長崎（平戸）
サセブ　鹿児島（甑島、中之島）
サセボ　和歌山（東牟婁）
サツボ　静岡（南伊豆）
サセンボ　和歌山（東牟婁、日高）、隠岐

などである。この中、伊豆新島のサシボノキの如きは『記』の「佐斯夫能紀」と近似しており驚く。右の諸例によれば、サシブ→サシャブ→シャシャブ→シャシャンボの経緯が結べるように思われる。以上から、『記』の佐斯夫の実体は従来の説の如くシャシャンボ、即ち志摩地方の「ササブ」・「ササブク」に比定してよいのではないかと思う。

注

(1) 正宗敦夫校訂『倭名類聚鈔』二十巻二十九オ、風間書房、昭和四十五年。
(2) 京都大学文学部国語学国文学研究室編『諸本集成倭名類聚抄』五一八ページ、臨川書店、昭和四十三年。
(3) 京都大学文学部国語学国文学研究室編『新撰字鏡　増訂版』天治本四一七ページ、享和本八二一ページ、臨川書店、昭和四十二年。
(4) 正宗敦夫『伊呂波字類抄』四十五ウ、風間書房、昭和五十一年。
(5) 正宗敦夫編『類聚名義抄』第一巻三四三ページ、風間書房、昭和四十五年。
(6) 中田祝夫・小林祥次郎著『合類節用集』一〇七ページ、勉誠社、昭和五十四年。
(7) 岡西為人重輯『重輯新修本草』三二四ページ、国立中国医薬研究所、民国五十三年。
(8) 『増補語林倭訓栞』中巻、名著刊行会、昭和五十三年。
(9) 第四章注(4)書五六九ページ。
(10) 同書はシャシャンボの学名 Vaccinium bracteatum Thunb. も附している。
(11) 小野田光雄氏（第四章注(13)参照）は、シャシャンボとナンテンの混同した理由を、両者の葉が類似し、秋にシャシャンボの

葉が紅葉した際、その照り具合がナンテンとよく似ているからではないかとなされる（昭和五十八年一月二十二日ご教示）。しかし、シャシャンボの葉はナンテンのそれよりも厚く、革質で違いが明瞭であるし、葉の附き具合も全く異なる。シャシャンボは植物辞典には常緑樹とあるが、小野田氏は植物は土壌により非常に違った様相を呈することもあると仰られる。但し、私が晩秋に見た三重県賢島と磯部の五本は、ナンテンのような鮮やかな紅葉は全くしておらず、若干の黄ばんだワクラバを除いてはサカキのような常緑を呈していたので、両者の混同の原因については今後の課題としたい。

(12) 倉田悟『日本主要樹木名方言集』一七九ページ、地球出版、昭和三十八年。

六

さて、佐斯夫が既説の通りシャシャンボであったとすれば、この実景を歌った歌謡中の佐斯夫は一体どういうことになるのであろうか。何度も繰り返したように、椿よりも背の高い佐斯夫はかなりの高木でなければならない。ところが、シャシャンボは植物図鑑によれば、二から三メートルの小灌木であり、私が実際に見たものも一メートルから二・五メートルまでだった。植物名は地方により同名異物植物が多いのは周知の通りである。そこで、シャシャンボによく似た別の高木であった、という可能性を考えてみたい。

シャシャンボによく似た木としては、シャクナゲ科の落葉灌木ナツハゼがまず浮かぶ。実際、三重県桑名には、ナツハゼの方言としてサセンボーというシャシャンボと同じ（前章参照）方言名がある。[注(1)] ナツハゼは高さ二メートル程になり黒い実と付き方が類似している。[注(2)] 両者の図を写真(四)（『草木大図説』による）に示すので比べて頂きたい。同じ方言名があるのは両者の類似に原因しているのかも知れない。しかし、ナツハゼは夏緑性であり、冬には落葉する。この歌謡を仮に「仁徳紀」に従い陰暦九月とするならばナツハゼは紅葉の時期でシャシャンボとは様子を異にしていたことになるし、樹高もシャシャンボとさして変わらないから椿より高くはなりそうにない。以上から、ナツハゼを歌謡中の佐斯夫に充てることはできそうにない。

次に、ヒサカキが想起される。賢島で気づいたことだが、ササブ即ちシャシャンボの話をしていると次第に話題となるのが、「ビシャコ」、「ビシャタ」、「ビシャラ」という木である。賢島の谷口さん、栩原さんは「この木には毒性があり、ササブと同じような実がなり、葉もよく似ているのでシャシャンボを食べる時には間違えぬよう注意しなければならない。」と言われる。また、「ビシャタはシキミの代用として霊前に供える木である。」とも言われる。幸い賢島グランドホテルにビシャタも生えていた（写真(五)）。『日本主要樹木名方言集』によれば、ヒサカキの項にビシャコ系のものが見られる。即ち、

ヒシャカキ　愛知、高知
ビシャカキ　三重、[注(3)] 奈良、和歌山、高知
ビシャコ　京都、奈良、[注(4)] 和歌山、徳島、高知

ビシャゴ　三重（北牟婁、伊勢市）
ビシャコー　和歌山（東牟婁）
ビシャタ　三重（伊勢市）
ビシャッコ　和歌山（日高）
ビッチャッコ　和歌山（西牟婁、田辺）

などで、『記伝』には「比ノ樹契沖云ゥ、今山里人はさせぼの木と云、柃（ヒサカキ）に似て小き実あり、（中略）柃は、和名抄に見えて今俗に毘左々木と云木なり」[注(5)]（傍点は川越）とある。

ここから、ヒサカキ→ヒシャカキ→ビシャカキ→ビシャカ→ビシャタ・ビシャラ・ビシャコの経緯が想定され、『牧野新日本植物図鑑』などで照らし合わせると、賢島のビシャコ・ビシャタは、ヒサカキ、ハマヒサカキと一致する。

写真(五)に示したように、ビシャタとササブは非常によく似ている。[注(6)] 極めて注意深く観察しても、ビシャタ（ヒサカキ）の方が、葉の鋸歯がやや大きく、葉のつき具合がやや密であるという位の違いで、両者の区別は判然とし難い。『日本主要樹木名方言集』によれば、ヒサカキの方言には、

オシャシャブ、山口（能毛）
シャシャビ　愛媛（西条）
ムシャシャギ　京都（山城）
シャシャ　香川（大川）
シャシャブ、山口（玖珂）

の如き、シャシャブ系の名称（傍点、川越）が見られ、これも両者が混同されやすいことの証になるかも知れない。実際賢島の海岸附近の所を歩いた時、この判別に困ったものだった。しかも、ビシャタの方が繁殖力が旺盛で数も多い。土地の人は、実を潰してみて黒い汁の出るものがビシャタであると判別している。ササブの方は、潰しても手が染まらず、果肉が出るだけである。

ビシャタの実には毒性がある、との言い伝え（栩原さんは「子供の頃に教えられた。」と言われる）のは、誰かが食して実際に災難に会った為に生まれたものかと思ったが、これがヒサカキであれば毒性はないことになる。この毒とする言い伝えは、ビシャタを有毒植物のシキミと代用[注(7)]（先述）にしたところから生まれたのではなかろうか。ヒサカキをシキミの代用とする地方は多いが、賢島では「シキミは、磯部の奥深い所に行かなければ見つからないので、ビシャタを代りに用いた。」（栩原）。ビシャタの実を潰すと、黒い毒々しい汁が溢れ出、たちまち手が真黒に染まる。毒と教えられればうなづいてしまうのも無理はないように思われた。

以上ヒサカキがシャシャンボに極めて似ていることを述べ来たったが、この木も図鑑類によれば樹高は三メートルまでであり、シャシャンボとほとんど変わらない。実際に私が見たヒサカキの樹高もこの程度で大樹ではない。サカキがその代用となるシキミはどうか。シキミは高さは約三〜五メートルであり、常緑灌木ではあるが山林中に生える。葉は長楕円形でシャシャンボ・ヒサカキと異なり鋸歯がなく、かつ両者よりも大きいし、枝先に輪生状に密につくのも異なるし、全体に香気があるので混同する可能性は全く考えられない。山林中に生えるので手に入りにくい（賢島）ところからヒサカキが代用されるのであって、樹の姿は類似していない。

次に想起されるのは、サカキである。先述（第四章）に紹介した小清水卓二氏の言に従い、昭和五十七年十一月二十三日、奈良県吉野郡十津川村玉置神社を訪れた。小清水氏の言われる「目通り一メートル」のシャシャンボとなればかなりの大木であり、丈も相当高い筈だと予想していた。しかし、神社の境内を探索した結果遂にシャシャンボは見つからず、小清水氏のそれではないかと思った木は実はサカキ（写真㈥）だった。私も最初に見た時にはこれをシャシャンボと間違えてしまった。サカキはシャシャンボの葉の茂り方と実のつき具合がよく似ている（写真㈦）。そして、写真㈥の如くシャシャンボよりもかなりの高木である。

玉置山は標高一〇一七メートルである。頂上近くの神社境内は天に近いような薄暗さで、杉の木の香りが強く漂っていた。日光と風を好む（第四章）シャシャンボがこのような場所に生える可能性はほとんど考えられないのである。小清水氏も葉の茂り方のよく似たサカキをシャシャンボと見間違えたのではなかろうか。

サカキは、ヒサカキがその代用となることが多かったが、これはサカキが山地に生えがちなためばかりでなく、葉の形も似ていることも原因していると思われる。そして、ヒサカキとシャシャンボは良く似ており、述べたように混同が行われている。そこで、『記』の歌に関して考えると、川の辺の斎つ真榊の背後には、実は背の高いサカキが（黒い実を付けて？）立っていたのではないか。この実景を見た作者は、シャシャンボが生えているものと誤認し「佐斯夫ヲ」と歌ったのではなかろうか。サカキは図鑑類によれば十メートルにも達する常緑小高木で、榊よりも高く、大きく枝を広げうることは、写真㈥によっても判る。

食用となる植物に対して敏感だった上代人が両者を見間違える訳はない、と言われてしまえばそれまでであるが、専門家の小清水卓二氏も玉置神社にシャシャンボがあると勘違いしておられるようだし、注意を払っていた私も初めはそのような印象を受けた。同じような黒い実のなる点や、葉の形、繁り方も似ているように私は思う。シャシャンボの写真を持ち地名情報室の楠原佑介氏をお訪ねした時、写真を見るなり氏は「これはサカキじゃないか。」と仰られた。四国のご出身で植物地名の研究も手がけておられる氏もかように混同するのであるから、深く観察しない（実を食べようとしたり、枝を神前に供える目的でこの木に近づくことをしない無関心な状態にある）一般人が両者を取り違えることとは思う。ヒメシャラ（つばき科の常緑喬木）をサルスベリ（みそはぎ科の落葉喬木）という（神奈川、静岡、三重、和歌山、高知、愛媛、大分、宮崎、熊本、霧島〈『日本主要樹木名方言集』〉）ように、常民の間では類似した植物を混同する例は極めて多く、むしろ一般的な現象とさえいえる。

以上、諸文献と実地の植物観察に基いて「仁徳記」の佐斯夫については、上代佐斯夫と称した樹木は現在のシャシャンボに当たる植物であろうが、歌謡の作者が実際に見たのはシャシャンボに似たサカキだったのではないかと推定するものである。大方のご教示、ご批判を仰ぎたい。[注(8)]

注

(1) 前章注(12)書一八一ページ。

(2) 前川文夫『植物の名前の話』九七ページ、八坂書房、昭和五十六年。

(3) 三重県亀山市出身の服部保子氏は、現にヒサカキの木を指して「ビシャカキ」または「ビシャコ」と発音された（昭和五十八年一月二十六日）。

(4) ご自宅で万葉植物を栽培しておられる石井庄司氏によれば、御出身の奈良県生駒郡信貴山においても、ヒサカキをビシャコと呼んでおられる、とのことである（昭和五十八年一月二十五日ご教示）。

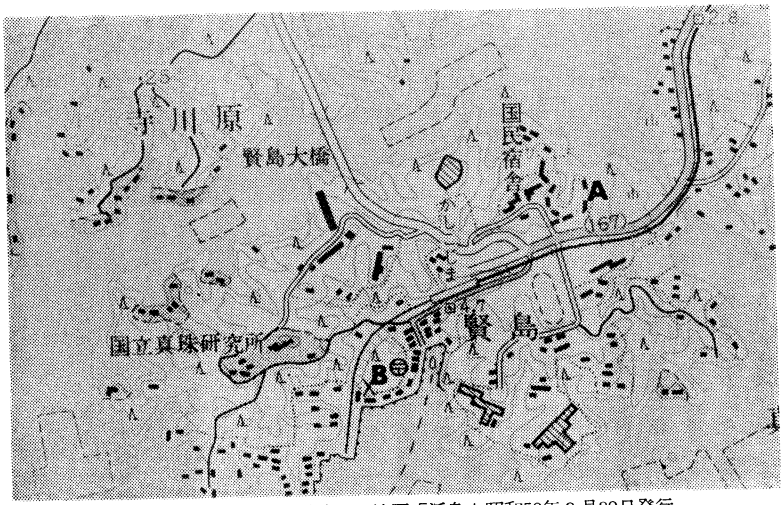
(5) 第一章注(2)に同じ。

(6) 面白いことに、シャシャンボによく似たギーマという植物が琉球や台湾に分布する（寺崎留吉『日本植物図譜』、平凡社、昭和四十七年）が、奄美群島の与論島ではヒサカキのことをクルギーマと呼んでいる（日野巌「奄美群島の植物方言」『宇部短期大学学術報告』四号、昭和四十二年）。これもシャシャンボとヒサカキとが似ていることに起因するのではないかと想像される。

(7) もくれん科の有毒常緑灌木。枝葉を仏前に供え、樹皮と葉を乾かして粉末にしたものを抹香・線香に作る。

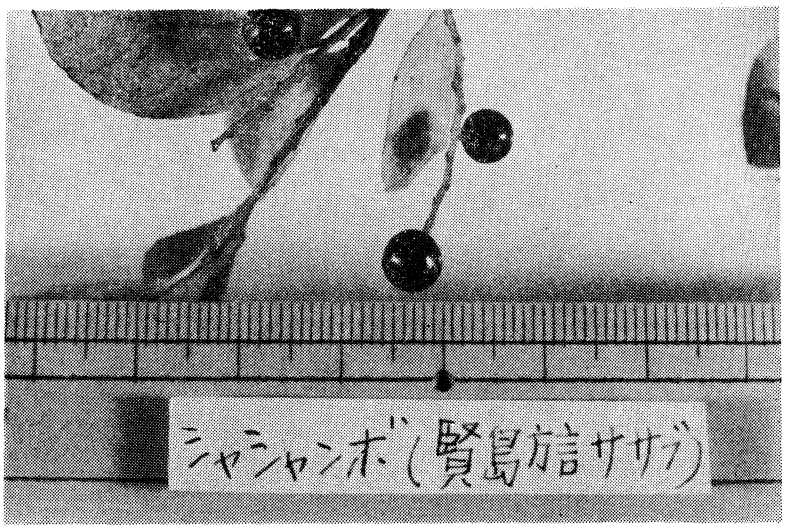
(8) 紙幅の都合で「ゆつ真椿」については触れなかったが、これについては在来品種といわれるヤブツバキと解して論を進めた。また、サカキがシャシャンボと葉が似、そして椿よりも高くなりうることは実地の調査から判明したが、サカキは山地に生えるという点で問題が残る。川の辺に四、五メートルに及ぶサカキが生えたのをまだ実際に見ていないので、この点の調査を更に続けたい。

本稿をなすに当って、高尾山浅川実験林、東京都立神代植物園、三重県志摩郡賢島グランドホテル、賢島ロッヂ、奈良県玉置神社松井侶利氏、日本地名学研究所の池田未則氏・大矢良哲氏・比嘉喜美枝氏、植物民俗研究家深津正氏、地名情報室楠原佑介氏、国学院大学文学部青木周平氏に多大のご援助、ご教示に預かったことを記して深く感謝申し上げたい。（昭和五十七年二月四日　川越いち子）



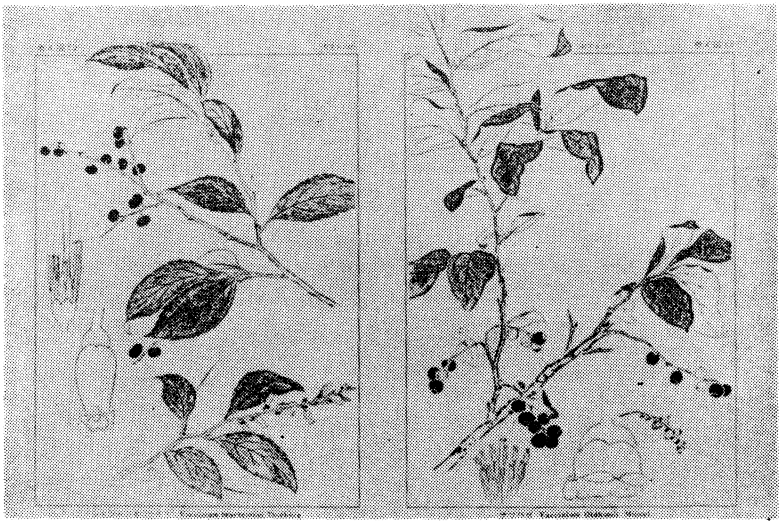
国土地理院発行二万五千分の一地図「浜島」昭和50年３月30日発行。

写真（一） 賢島グランドホテルの「ササブ」　1982.11.20
川越いち子撮影。木の右下に30cmのスケールを立ててある。

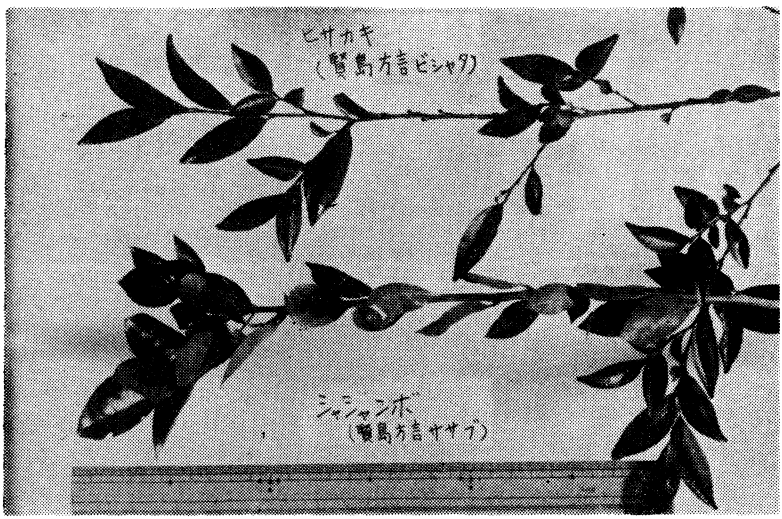


写真（二）賢島グランドホテルの「ササブ」の実　1982.11.24
大妻女子大学視聴覚センター撮影。

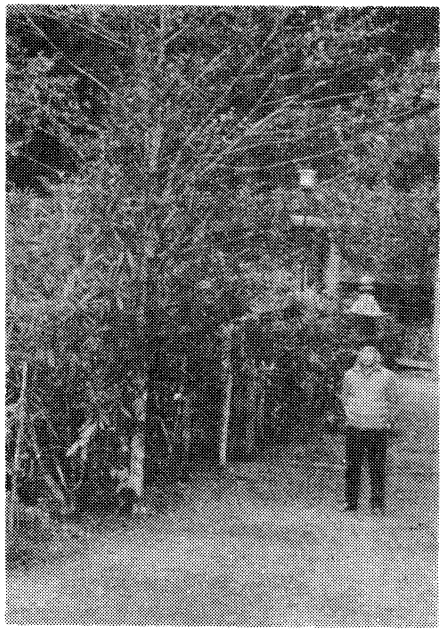
写真（三）賢島グランドホテルの「ササブ」 1982.11.20　川越いち子撮影。
白っぽく変色し斑点のみられるのがワクラバ．スケール30cm。



写真（四）『草木図説』によるシャシャンボ（左）とナツハゼ（右）
図だけで見るとよく似ている。



写真（五）ヒサカキとシャシャンボ（賢島採取）　1982.11.24
大妻女子大学視聴覚センター撮影．両者非常に似ている。



写真（六）玉置神社のサカキ　1982.11.23
川越いち子撮影

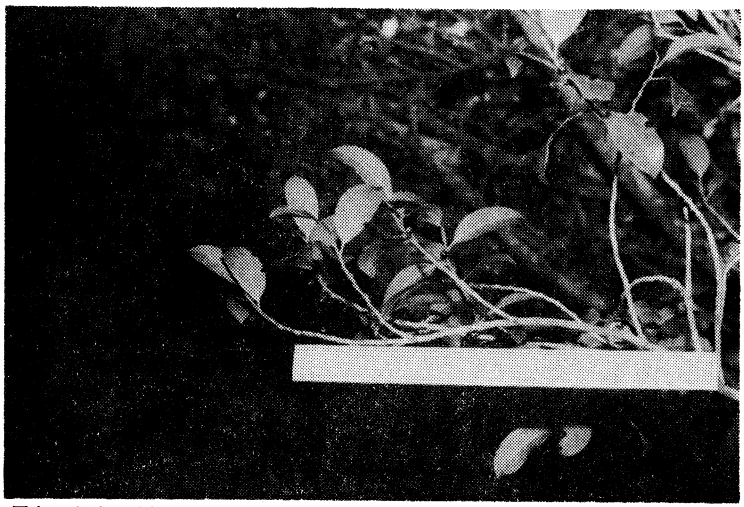


写真　（七）玉置神社のサカキ　枝振りがシャシャンボとよく似ているように思われる。
1982.11.23　川越いち子撮影